

01・媚薬を浴びせられ、身体が思うように動かないまま目覚める

前日譚トラック02から三日後。

とある年の春。十八時ごろ。

場所は大陸西部。

天気は雨。気温は二十二度程度。

場所は、主人公のおじ・おばが住む屋敷。

そこは、奴隷商人イザベラの屋敷からも、主人公達の住む町からも遠く離れており、どちらから向かうにしても、丸二日はかかる距離にある。

主人公は今、その屋敷の一室に運び込まれ、眠っていた。

部屋は広く、ゆとりがある。

なので、主人公が眠るベッドから少し離れた場所にメルヤ達がいて話していても、主人公の眠りは妨げられない。

SE1 外の、雨の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【建物の中から、外の環境音が聞こえる】

【0―5秒ほど流してSE2】

【その後、音量が小さくなる】

【トラック終了まで流し続ける】

そんな主人公は今、眠りながら、家族や騎士団の面々、そして、メルヤを始めとする、亜人の少女達に謝り続けていた。

夢の中でも頭を下げ、罪悪感に打ちひしがれているのだ。

こうなったのはすべて自分の意思によるもので、主人公は一切後悔していない。

しかし、それでも謝っている。

気が弱いのだ。

—— お父さん、お母さん。

お姉さま達、騎士団の皆様。

チハちゃん、亜人のみんな。

そして……メルヤさん。

ご迷惑をおかけして、本当にごめんなさい……。

主人公が、こうも謝罪する理由。

それは、これまでみな一丸となって積み上げてきた計画を、主人公一人がふち壊し、独断専行した結果、今に至るからだ。

しかし、状況は少々複雑だ。

主人公は確かに計画を壊し、与えられた任務を無視して行動した。

だが、目的は正しく果たしている。

騎士団の悲願である『亜人の少女達を救出する』という作戦そのものは、見事成功させたからだ。

先日まで悪徳商人イザベラの屋敷に囚われていた亜人の少女達は、主人公の手引きにより全員脱出・移動し、無事。

今は主人公のおじおばに屋敷にかくまわれる形で、保護されているのだ。

そうなるまでの経緯は次の通りだ。

三日前の夕方、主人公はメルヤの部屋から出た後、すぐさま地下牢へ向かった。

それからメルヤと一番親しく、亜人の少女達のサブリーダー的存在でもあるチハにすべてを打ち明け、脱出計画を伝えて協力を頼んだ。

これに応じたチハは、自身をリーダー代理とした少女達全員で、主人公がすでに確保してあった脱出ルートで逃走を開始。

主人公だけが屋敷に残ると、何食わぬ顔でメイドとして晩餐会の開始時刻を待った。

それから、メルヤが出品される段階になって、主人公はメルヤを解放。

突然の出来事にイザベラが虚を突かれているうちに……イザベラに一撃食らわせて逃げてきたという訳だ。

そして主人公とメルヤは、チハ達とは別ルートから脱出。

元々は騎士団との待ち合わせ場所に使う予定だった地で合流したのち、警備の状況を鑑みて……主人公の街ではなく、その反対方向のおじ・お婆の家まで徒歩で移動したのである。

そう聞くと『結果オーライではないか。多少叱られはしても、厳罰を受ける程ではないだろう』と思われる方もいるかもしれない。

しかし本来なら、メルヤ以外の全員は、騎士団に守られながら、もっと安全に、楽に逃げられるはずだった。

途中は洞穴に隠れての野宿も強いられ、みな疲労やストレスは、非常に高い状態にあったと言わざるを得ない。

その一点においても『いい事だけをした』とは言えないだろう。

それでも文句を言われなかったのは『主人公は、騎士でいる事よりも、メルヤを選んだ』と、全員が理解していたからだが……。

主人公は夢の中でひたすらにごめんなさい、ごめんなさいと謝罪しながら、うんうんとうなされているのだった。

ところで、このような行いをした主人公は、すでに騎士をやめる意向を固めている。

騎士団も『それはいい。こちらから追い出す手間が省けた』と言わんばかりに、すんなり承認するだろう。

だから主人公は、すでに無職と言って差し支えない。自身の今後についても、考える必要がある。

もちろん、このような問題を起こした以上、もう街にはいられないだろうし……。

かといって、他の街で騎士として雇ってもらう事も難しい。

となれば、他の仕事をする事になるが……主人公は騎士の仕事以外は、アルバイトしかした事がない。転職に行かせそうな資格も持っていないし、騎士ではない主人公は本当に、ちよっと騎士的な事が出来る程度の一般人である。

このように主人公の人生の難易度は、すっかり上昇していた。

それだけなら自業自得と言えるが、それだけではない。

今匿ってくれているおじお婆も含めて、家族には多大な迷惑をかけてしまった。

主人公はこれを、深く反省している。

『もったいいやり方があったかもしれない』そう思う事はある。

でも、後悔はしていない。

だから主人公は、本当に騎士には向いていなかったのだろう。

家族がみんな騎士だからといって、自分も騎士を志した。

騎士になって認められれば、自分で自分を好きになれるような気がした。

そんなスタートからしてきつと間違っていて、だからこれは、当然の結末なのだろう。

なので主人公は、次第に謝罪モードから言い訳モードに移行しつつ、それでもやはり謝り続けていた。

……どうしても我慢ならなかったんです。

メルヤさんを犠牲にチハちゃん達を助け、騎士としての功勲をあげる。

そんな人間失格の行為をする位なら、騎士失格の方がずっといい。

わたしはそう思ったんです。

と、一度は開き直ったそぶりを見せながら。

……とはいっても、みんなを完全に安全に助けられたわけではありません。

途中、疲れて無口になってしまった子もいましたし、途中イザベラにかけられたよくわからない『薬』のせいでわたしの体調も正直万全ではなく。メルヤさん達に、何度も心配をかけてしまいました。

そもそも、家族にここまで迷惑をかけてしまった以上、わたしは結局、人間失格な気がします。

と、やはり謝罪モードに戻り……。

ああ、やっぱり……。

——お父さん、お母さん。お姉さま達、騎士団の皆様。

チハちゃん、エイミーちゃん、ダイアナちゃん。

私を信じてついて来てくれた、亜人のみんな。

……メルヤさん。

わたしは結局、最良の結果を生めませんでした。  
正しく生きられなくて……本当にごめんなさい。

そう思って、眠りながら涙をこぼしていた。

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

● 正面 30センチ

「ガラテアに話しかけている。

穏やかに落ち着いて、自分達の状況を伝えている。

『騎士様』とは主人公の事」

……はい。こちらは無事に到着致しました。

騎士様のお陰で、私（わたくし）達は一人として欠ける事なく、息災でございます」

そんな主人公が目を覚ます、数分前。

この部屋では『機械人形』を介した通信が行われていた。

メルヤとチハが、亜人の少女達を代表して、ガラテアと状況報告を行っているのだ。

大陸において、この『機械人形』の用途は様々だ。

だが、ここで使われているのは『自力で移動する、人形の姿をした小型の通信機』と思  
ってもらって差し支えない。



▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

【音質が極端に悪い】

〈ガラテア〉

「メルヤとチハに話しかけている。

あからさまにホツとして、喜びを隠しきれない様子で。

少し声が大きくなる。

しかし、ガラテアとしては最大限冷静に対応しようとしている。

なので、そこまで極端な表現にはならない」

然様（さよう）であつたか……！

【一呼吸おいて。

少し冷静さを取り戻してから話し、基本的な点を確認する。

この通信は、本編01開始より、少し前から行われている。

なのでガラテアは、すでに『どうやら、この部屋には最低二人、亜人の少女がいるよう  
だ』と察している。

よって『君』ではなく『君達』になる」

報告、感謝する。

では、今話している君達が、亜人の娘達のリーダー格という認識でよいか？」

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

● 正面 30センチ

「ガラテアに話しかけている。

穏やかに、落ち着いて頷く。

そして、ガラテアに自己紹介をする」

はい。私（わたくし）が最も年長の、メルヤでございます」

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

〈チハ〉

「ガラテアに話しかけている。

落ち着いて、はきはきと返事をする。

『快活で少し粗野な印象ではあるが、落ち着いており、知性を感じさせる少女』という  
感じで」

そうです！ あたしは、チハっす。

『メル姉』とはメルヤの事。

チハはメルヤとの付き合いが長く、彼女の事を姉のように慕っている。  
なので、このように呼ぶ。

『させて』が『さして』になる』

メル姉（ねえ）の補助をさしてもらってます！」

メルヤが答えると、チハが続く。

これに対して、今は遠いガラテアが、小さく安堵したような息を漏らす。

このように、ガラテアの声には、怒りではなく、もっと別の感情が滲んでいる。

だが、いまだ夢の中にいる主人公には、その声は遠く、ぼんやりとしか聞こえない。

だから『厳しさの権化』としておなじみの姉が、不出来な末妹を叱るところか、内心泣きそうなほどホッとしている事には気づかない。

### ▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

【音質が極端に悪い】

へガラテアへ

「メルヤとチハに話しかけている。

落ち着いて話しつつ、内心ほっとしている。

現状がわかり、また、通信に出た亜人の少女達が声からして元気そうで、かつ安心して話ができそうな相手だったので。

ガラテアは正直な所『通信できたはいいが、亜人の少女達とともに会話ができず、情報交換ができない』という事態も想定していたので。

以後、『奴』とは主人公の事』

では、奴の容体が落ち着くまでは、君達に対応していただくでしょう。

【冷静に、自分達騎士団の状況を伝える。

しかし『ヘテアの森』は、屋敷からまだまだ遠い位置にある』

私達は今、ヘテアの森に到着した。

しかし、これから山を越える関係で、到着までは二日ほどかかる見込みだ。

【少し苦々しそうに。

自分達は騎士団という一般市民を守る立場でありながら、今はメルヤ達に頼らざるを得ないので。

また、主人公が苦しんでいるのに、すぐに助けに行けないので」  
すまないが、それまで奴を頼む」

▲ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

● 正面 30センチ

「ガラテアに話しかけている。

冷静に落ち着いて。

『全く問題ない。任せてほしい』という感じで  
はい」

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

〈チハ〉

「ガラテアに話しかけている。

落ち着いて、はきはきと返事をする。

いかにも『実年齢より大人びており、場をまとめるのに慣れている少女』という感じで  
はい！」

そしてメルヤとチハは、言葉の通り元気だった。

元々亜人は、基本的に普通の人間よりも体力があって丈夫だ。

ゆえに、肉体的には上位互換と言ってよい存在で、この数日の移動にも、何とか耐えら

れたのである。

それからこの通り、騎士団との連絡も無事に叶った。

さらに主人公も、ガラテアさえも及び知らぬところでは、別の動きも活発化していた。事態は、主人公が寝ているうちに、作戦成功という形で収束に向かいつつある。

### ▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

【音質が極端に悪い】

〈ガラテア〉

「【通信を切ろうとする。】

亜人の少女達に申し訳ない気持ちはあるが、ゆっくり話している時間はないので……では、特に連絡事項がなければこれで……」

### ▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

〈チハ〉

「【ガラテアに話しかけている。】

意を決した様子で話題を切り出す。

少し迷ったものの、どうしてもガラテアに伝えたい事があったので」  
「……あの！　ガラテア様」

しかしこの現状に、不安を感じているものもいた。  
チハだ。

彼女は今、自分の事よりも、自分達を助けてくれた主人公の事を案じているのだ。

### ▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

【音質が極端に悪い】

「ガラテア」

「チハに話しかけている。

少しきよんとして。

一体何を言われるのか、見当もつかないので。  
なので、努めて優しく話す。

もしチハ達五人の少女達に不安な事があれば、積極的に話してほしいので。

また『ガラテアが威圧的な態度を取るせいで、チハは必要な情報を伝えづらくなってしまった』といった事になってはまずいので。

それから、チハの事を『無駄な話はしなさそうな子だ。何か、大切な話をしたいのだから』と捉えていたので」

……ん？ どうした？」

チハ、緊張した様子で一度姿勢を正すと、はっきりとよく通る声で話し始める。

### ▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

〈チハ〉

「【ガラテアに話しかけている。

意を決した様子で話題を切り出す。

『元気』『大丈夫』をやや強調して。

ひとまず『自分達亜人は元気だ』と伝えたい。

それから、主人公について話したい。

だが、緊張のあまり、らしくもなく、少しまどろっこしい表現になる】

今話した通り、あたし達皆元気ですし、屋敷のおじちゃんとおばちゃんもすぐえ助けてくれるんで。あたし達は大丈夫です。

【緊張した様子で。



ここから本題なので」

……でも、あの。

【主人公を『大将』と呼びかけて、『騎士様』に変える。

チハは主人公になつき、主人公を『大将』と呼んでいる。

だが、この呼び方では、ガラテアに主人公の事であると気づいてもらえないかもしれないかもしれないと考えたので。

『ああなっちまった』とは『体調を崩しただけでなく、倒れて眠り続ける事態に陥った』という意味』

た……騎士様は、あたし達の為に、すげえ頑張ってくれたんです。

一人で、全員何（なん）とかしようとして。ああなっちまったんです。

【※マークのセリフ終わりまで、真剣に、一気に言う。

『どうかよろしくお願いします！』は、機械人形に向かって頭を下げながら言っているイメージで』

だから。

解毒剤、待ってます！

どうかよろしくお願いします！」※

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

【音質が極端に悪い】

へガラテアへ

「【少し驚いて息をのむ。】

主人公がチハ達巫人の少女達のために尽くし、その結果、彼女達から非常に慕われているらしい事がわかったので。

先月最後に直接言葉を交わした時は、あまりにも頼りなかった主人公が、そうまで変化した事に驚いているので。

また、それだけではなく『いや、もしかすると、これまで自分が気づいていなかっただけで。主人公は元々そういう、勇気ある人間だったのかもしれない』と考え直し始めている」

……！」

ガラテアが、驚いて息をのむ。

それから、チハという若き巫人の娘が、この短期間に、主人公へ、いかに信頼を寄せるようになったかを理解して。

主人公への見方をさらに変え……『彼女達からの信頼は、妹の処分を軽くするための手立てになりそうだ』と思っけていても。

主人公は気づかない。

主人公には、慕われている自覚がないからだ。  
とにかく鈍く、自己評価が低いのである。

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

【音質が極端に悪い】

〈ガラテア〉

「【チハに話しかけている。

落ち着いてはつきりと。

少しでもチハ達に『通信しているのは、頼りがいのある騎士である』『この人に任せておけば安心だ』と思ってもらえるようにしている。

また、チハの言葉を受け、気を引き締めている」

勿論だ。君達の思いに報いる為にも、迅速に向かうと約束する。  
では、これにて通信を終了する。

【二人に話しかけている。

妹を任せる姉として、二人にしっかりと敬称をつけて頼み込む】  
メルヤ殿。チハ殿。

どうか、それまであいつを頼む」

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

【次の『チハ』のセリフと重ねて流す】

● 正面 30センチ

「ガラテアに話しかけている。

冷静に落ち着いて。

『全く問題ない。任せてほしい』という感じで

はい……！」

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

【ひとつ前の『メルヤ』のセリフと重ねて流す】

〈チハ〉

「ガラテアに話しかけている。

落ち着いて、はきはきと返事をする。

いかにも『実年齢より大人びており、場をまとめるのに慣れている少女』という感じで】

はい！」

SE2 機械人形の通信が切れる音

【最初から最後まで流す】

こうして、通信は途切れた。

いつの間にか夢から覚めた主人公はうつすらと目を開け、現状がまるでよくわからないまま、天井を眺めている。

——あれ……。

ここ、つて……。

だが、メルヤとチハはまだその変化に気づかず、話し込んでいる。

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

〈チハ〉

「メルヤに話しかけている。

少し緊張が解けた様子で。その位、ガラテアとの通信は緊張するものだったので……はあ。良かったな。メル姉（ねえ）。

後（あと）二日なら、何（なん）とかなりそうだよな？」

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

● 正面 30センチ

「チハに話しかけている。

穏やかに冷静に、落ち着いてチハを諭す。

かつ、少し緊張が緩んでいるチハをたしなめるように。

メルヤは『主人公は、まだ目を覚ましていない』と思っているので。

また『本当に予定通り二日でつくとも限らないし、解毒剤がすぐに効くとも限らない』と考えているので」

そうね。でも、まだ油断はできないわ。

騎士団の到着まで、できる限りの事はしましょう」

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

〈チハ〉

「メルヤに話しかけている。

落ち着いて、しかし力強く返事をする」

おう。

【今後について提案しようとする。

しかし『そしたらさ。とりあえず今夜は元気な奴だけ募って、今後の話し合いをしとくよ。今日からメル姉は大將につきつきりになるんだからさ』と続けようとしたところで、ふとベツドの方を見る。

その瞬間、主人公の異変に気付き、言葉が途切れる】

そしたらさ。とりあえず……。

【驚いて息をのむ。

それから、思わず大きな声を出しそうになったのをこらえる。

主人公が目を覚ましたらしい事に気づいたので】

……！」

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

● 正面 30センチ

「チハに話しかけている。

穏やかに、不思議そうに。チハが急に話すのをやめたので」  
どうしたの？」

そんな主人公に最初に気づいたのは、チハだった。

チハはまず両手で口を覆うと、思わず大声を上げてしまいそうな自分を抑え込む。  
それから深く息を吸って、己を落ち着けてから……メルヤにこの事実を告げた。

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

〈チハ〉

「メルヤに話しかけている。

ひそひそと。

内心非常に驚きつつも、必死でこらえている。

主人公の身体に障らないよう、大きい声を出さないようにしているので」

……メル姉（ねえ）……！ 大将が」

▲ ボイス加工あり



【少し遠くで聞こえる】

● 正面 30センチ

「【驚いて息をのむ。

とっさに声を抑えてはいるものの、いつもより取り乱した様子で】

……!」

SE3 メルヤの足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくるが、まだ少し遠い位置にいる】

だがメルヤは、これを聞いた途端、即座にベッドへ駆け寄っていく。  
それからすぐに、起きたばかりの主人公へ、興奮気味に声をかけた。

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

● 正面 30センチ

「【主人公に話しかけている。

泣きそうな声で。

とっさに声は抑えているものの、感動をこらえきれないようです」  
ああ……！

お目覚めになられたのですね……！」

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

〈チハ〉

「【驚いて息をのむ。

声を抑えつつも、先ほどよりも『えっ!!』とわかりやすく驚いている感じで。こんなにも取り乱しているメルヤは見た事がないので。

また、これによって、メルヤがいかにも主人公を想っているか実感したので」  
……！」

だからチハにとっては、メルヤの反応は意外そのものだった。  
メルヤはいつも、沈着冷静な姉貴分で。

イザベラの屋敷にいる間も、弱音一つこぼさずチハ達を支えていた。  
そんな彼女が今、別人のように取り乱しているのだ。

それだけ、主人公が目覚めますのを待っていた、という事だろう。

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

〈チハ〉

「メルヤに話しかけている。

『……』で大きく息を吸った後、一呼吸おいて。

できるだけ落ち着いて、明るく。

『ここは、できるだけ早く主人公とメルヤを二人きりにさせるのがよい』と判断したので。

『他の奴ら』とは、現在屋敷の一階で食事をしている、他の亜人の少女達のこと……。

じゃあ、メル姉。後（あと）は頼んだ。

他の奴らは、あたしが見とくから」

だからチハは、ひとまずこの場から退散する事にした。

それはまず、主人公とメルヤを早く二人きりにしてあげたいと思ったからだ。

次にチハは、すでに主人公の容体について、簡単にメルヤから聞かされている。

これから今度は、主人公がその説明を受ける事になるだろうが……。

その場には、自分はいない方がいいだろう。  
そう判断したのだ、

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

● 正面 30センチ

「チハに話しかけている。

少し我に返って」

……うん！

【内心少し照れつつ、できるだけ普段の『沈着冷静な姉貴分』に戻って話す。

チハの前で取り乱してしまい、少し恥ずかしい。

だが今は、それを取り繕う余裕もないので」

大丈夫よ。任せて。

チハこそ、よろしくね」

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

〈チハ〉

「メルヤに話しかけている。

落ち着いて、穏やかに返事をする」

おう」

〈主人公〉

「メルヤさん……？　チハちゃん……？」

こうして主人公は、ついに現実に戻ってきた。

状況は、いまだよくわからない。

だが、自分達は無事おじお婆の家につき、屋敷は安全そうで。

少なくともメルヤとチハは、歩き回って話せるほどには元気らしい。

そして自分はこの客間に寝かされており、ただいま、ようやく眠りから覚まして……寝ている間、メルヤ達にとっても心配をかけたらしい。

それらの事は、よくわかった。

SE 4　メルヤの足音2

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてきて『正面30センチ』に適切な距離感で止まる】

ここでやっと加工なしで「正面 30センチ」の近さになる。

● 正面 30センチ

「主人公に話しかけている。

落ち着いて話そうとしているが、少し泣きそうな声で。

その位、主人公が意識を取り戻した事が嬉しいので」

はい。ここに。メルヤでございます」

〈主人公〉

「えーつと……。あの……おは、よう？」

しかし、逆に言えば、それ以外の事はよくわからない。

今の主人公には、時刻さえもわからず、挨拶の言葉すら疑問形になる。

それに、今回眠り込む要因となった謎の体調不良は、いまだ回復していない。

主人公の身体は、屋敷を逃げ出した時からずっと熱を帯びていて、やけに下半身がうずく。

それなのに、全身が思うように動かせなくて、辛いのだ。

これはきつと『あの薬』のせいだ。

そしてもしかすると、その効力って……。

と、諸悪の根源についても想像がつく位、主人公は全身で不調を実感しているのだ。

### ●正面 30センチ

「主人公に話しかけている。

つとめて落ち着いて話す。

自分の感情を抑えて、冷静に主人公に現状を伝えたいので」

騎士様……もう心配ございませんわ。

貴方様のおかげで、私達は救われたのです」

だから主人公はあまりよく動かない身体で、ひとまずメルヤの方を見た。

するとメルヤは、目に涙を浮かべつつも、穏やかに答えてくれる。

その姿に主人公は思わず胸がきゅっと締め付けられるが、今の主人公には、少々欲しい情報が多すぎた。

うまく話せないくせに、もう次の質問をしてしまう。

〈主人公〉

「みんなは……？」

SE5 チハの足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてきて『正面30センチ』に適切な距離感で止まる】

〈チハ〉

「主人公に話しかけている。

穏やかに優しく」

そうだよ。大将。全員無事！」

そこへ今度は、チハがやってきて補足する。

その姿は健康そのもので、主人公はたまらなくホッとする。

〈チハ〉

「穏やかに優しく。



できるだけ簡潔に、主人公に現状報告する。

できるだけ落ち着いて話そうとしている。

しかし、だんだん声が明るく、興奮気味になってくる。

その位、主人公が目覚めた事が嬉しいので。

また、主人公に言われていた通り『到着したら、まずは主人公の姉であるガラテアと連絡を取ってくれ』と頼まれた事を、きちんと守れたので――

あたし達ちゃんと、大将のおばさんちまで来れたんだ。

ここに居ない奴は、一階でメシ食わせてもらってる。

ガラテア様とも、ちゃんと連絡ついた。

もうすぐ来てくれるってさ！

「少しテンションが上がって誇らしげに。

チハはイザベラの屋敷にいた頃、つまり主人公の正体を知る前から、主人公を『見どころのある女性だ』と気づき、慕っていた。

その上今は、それが当たっており、主人公が血統も含めて立派な騎士である事がわかった。

なので、嬉しい。『やはり自分には見る目があった』『やはり主人公は、イザベラに顎で使われる存在などには収まらず、もっと認められた、素晴らしい女性だった』『自分としては血統は特に問題にしていなかったが、どこか上品な雰囲気があるのには気づいていた。』

これに気づけたのも何だか嬉しい』と、誇らしい気分になっている。

なので、ガラテアの事も褒めているが、実際は主人公を褒めている側面が強い」  
すげーな。

大将の姉貴って、マジで騎士団の偉い人だったんだな！」

——あ、そうなんだ。

……そっか。

わたしたち、ちゃんと、無事なんだ。

わたし、なんとかみんなを守る事ができたんだ……。

〈主人公〉

「そっかあ……。

そうだったんだあ……。」

主人公、チハの言葉に、へなへなと脱力しながらも、何とか頷く。

しかし、いくら力が入らないからと言って、伝えたい事はもっとあったはずだ。

少なくとも今のこの気持ちをも、まずは言葉で表現しようとしていたはずだ。

なのに頭はうまく回らず、実際に主人公が発した言葉は、極端に短く縮まっていた。

そんな主人公を見て、チハが鼻をこすって笑う。

主人公がいつも通りの『ぼんやり系』だとわかって、安心したのかもしれない。

〈チハ〉

「主人公に話しかけている。

『そうだったんだ』という返答に対して『そうだったんだよ』と少しコミカルに、明るく断言する。

また、ぼーっとしている主人公がなんだか面白いので、笑ってしまいがら話す。

チハにとって、主人公は少々頼りなく見える事はあれど、ずっと尊敬する女性である。しかし本人はその自覚が全くなく、しょっちゅうしまりのない顔をしているので」

そうだったんだよ。だから安心しろよな！

「さらっと、できるだけ何でもない事のように言おうとする。

しかし、声は震え、涙声になっている。

内心は心揺さぶられているので。

主人公がようやく目を覚まし、会話ができた事で、ようやく『主人公は無事だ』と安心できたので。

病状の事は理解しており、メルヤからも『まだ油断してはならない』と言われている、それでもとても嬉しいので」

んじゃあたしも、メシ行ってくるから。  
ゆっくり休んどけよ。

大将の身体は、今からメル姉（ねえ）が診て、説明してくれるから。  
わかんねー事は、何でもメル姉（ねえ）に聞け」

〈主人公〉

「……あ、う、うん……！」

ありがとう、チハちゃん……！」

あの……！」

SE 6 チハが主人公の肩を、ぽん、と叩く音

【最初から最後まで流す】

だが、気丈なチハでも、こみ上げてくるものはあったようだ。

起き上がり、なんとかもっとお礼の言葉を伝えようとする主人公を、チハはそっと肩に手を置いてベッドに戻す。

それからふいに近づく、泣きそうな声でこう言った。

▲ ボイス加工あり

【『正面15センチ』の距離感に加工する】  
〈チハ〉

「主人公に話しかけている。

少し泣きそうな声で、嬉しそうに。

本当は何でもないふりをして、『年の割に大人びていて、主人公とメルヤの妹分として頼れる少女・チハ』として振る舞ったまま去りたかった。

だが、無事に目覚めた主人公を見たら、感情が込み上げてきたので。

しかし、泣いているところは見せたくないのです、そそくさと去る」

目え覚めて、ほんつとに良かった……！！

じゃあ、後でな！」

SE 7 チハの足音 2

【最初から最後まで流す】

【だんだん遠ざかる】

SE 8 チハが扉を閉める音

【最初から最後まで流す】

【少し遠くで聞こえる】

【もともと扉は開いていたので、開けるS Eはない】

こうしてチハは部屋を出ていき、客間には主人公とメルヤの二人だけが残される。短い再会ではあったが、主人公はまた泣きそうになった。

チハがいかに自分を想っていてくれたか、よくわかったからだ。

〈主人公〉

「……チハちゃん。ずっと心配してくれてたんだね」

●正面 30センチ

「ここからすべて、主人公に話しかけている。

先ほどから、何とか持ち直して。

つとめて穏やかに、落ち着いて話す。

チハが泣きそうにしているのを見たら、自分は冷静でいなくてはという気持ちが働いた  
ので」

はい。あの子、貴方様が目を覚まされるのを、ずっと待ちわびておりましたから」

〈主人公〉

「そっかあ……」

主人公がつぶやくと、メルヤが微笑む。

だから主人公は少し恥ずかしくなりながら、ベッドにぐったりと身体を預けた。

先ほどに増してうまく喋れなくなり、身体はますます、とても重いのだ。

なのに、あの薬の症状と思われるものは、すさまじい速度で強まっていく。

今ではメルヤと二人きりでいる事すら、とてもまずい事のように思えてくる。

このままだと、主人公はおかしな事を口走りそうだ。

もし身体が動いたのなら、おかしな発言だけでなく、おかしな行動までしかねなかっただろう。

……そう思うと、動けなくてまだマシだったのかな……。

まずいな。

一通り説明と診察をしてもらったら、『しばらく一人で寝かせて欲しい』ってお願いしよう……。

ゆえに主人公は、このような事をぼんやり考えながら、またメルヤを見上げる。

メルヤはそれを優しく、でも、どこか痛ましそうに見つめている。

● 正面 30センチ

「優しく穏やかに。」

自分を含めた亜人の少女達全員が主人公を心配していた事を伝えたいので」  
もちろん、私（わたくし）も、他の子達もですわ。

騎士様、よくぞお目覚めになりました。

【少し悲しそうに、心配そうに。

その位、一時、主人公の体調は思わしくなかったのので」  
一時（いちじ）は少々……心配でございましたから……」

〈主人公〉

「うん……」

だがここでメルヤの声はかげり、言いにくそうによどむ。

だから主人公は、ここは自分から言い出すべきだろうと判断した。  
イザベラに浴びせられた、怪しい薬の効能。

それについて、心当たりがあったからだ。



〈主人公〉

「あの、メルヤさん……」

● 正面 30センチ

「【気持ちを切り替えて、主人公を診る『看護師』モードになる。  
つとめて穏やかに、落ち着いて話す。

自分の感情を抑えて、冷静に主人公に現状を伝えたいので。

また、主人公が、言い出しにくい事でありながら、メルヤを想って自分から薬の話題を切り出そうとしている事が伝わってきたので」

……ええ。

チハが今言った通りです。

貴方様の容体は、未だ不安定。

病状について、詳しいご説明が必要な状況にございます」

〈主人公〉

「……やっぱり、そうなんだね」

メルヤが穏やかに、病状を語り始める。

これに主人公は『覚悟はできている』という気持ちを伝えるためにも、可能な限り落ち着いた姿を見せる。

だが、そんな主人公でも、メルヤが次にとった行動は予想外だった。

メルヤは近づき、主人公の右耳に話しかける。

これによって声の聞こえる方向が『正面』から『右』になる。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「優しく、穏やかに。」

ひそひそと伝える。

すでにチハはおらず、二人きりだが、その方がよいと判断したので。

メルヤはチハに『薬を介して悪性の魔術をかけられており、全身の検査が必要である。

裸になってもらう必要があるので、主人公に恥ずかしい思いをさせないためにも、最少人数で検査・治療を行いたい』としか伝えていない」

でも、ご安心なさって。

チハには詳細を伏せております。

あの子達には、知られたくないでしょうから」※

〈主人公〉

「……あっ……」

だから、主人公は確信した。

……やっぱり、そういう事なんだ。

だから、詳しい話は聞いてないチハちゃんでも。

気を遣って、すぐ出ていってくれたんだ……。

と、メルヤの言葉に事態のおおよそを察して、思わず顔を熱くする。

薬の効能については、現在の自分の状況や、イザベラが所持していたものという点からも、予想はついていた。

しかし、こうして気遣われると、いよいよ恥ずかしい。

だって相手は、ずっと憎からず思っていた、いや、かなりわかりやすい好意を抱いて接していたメルヤなのだ。

メルヤが優しく、落ち着いているほど、主人公は恥ずかしくなる。

なぜなら、おそらくあの薬はきつと……何か、性的な欲求を強める力があるからだ。

●正面 30センチ

「優しく穏やかに、落ち着いて話す。

主人公の様子から『おそらく主人公も、効能については心当たりがあるのだろう』と察している。

だが、もしかすると勘違いの可能性もある。

そのため、最初から順を追って確認していく事にする」

もしかすると、記憶に齟齬があるかもしれないから。最初から振り返る形で確認してゆきましよう。

三日前、屋敷から脱出する直前。

「そつと優しく確認する。

もしかすると『とっさの事だったので、記憶があいまいだ』という答えが返ってくるかもしれないので」

私（わたくし）達がイザベラに吹きかけられた薬の事を、覚えておられますか？」

〈主人公〉

「うん……。ピンクの、甘い匂いのする薬だね」

●正面 30センチ

「優しく穏やかに同意して」

然様（さよう）でございます。

「穏やかに言いつつも、『あの忌まわしい』に、少しでも嫌悪感をにじませて。

その位、例の薬について怒りを感じているので」

あの忌まわしい、甘い匂いのする液体です。

貴方様はあの時から少しずつ体調を崩され、どうにか歩く事はできましたものの、今朝、とうとう倒れてしまわれました。

「そっと優しく確認する。」

やはりもしかすると『当日はそれよりも前から意識がもうろうとしていて、記憶があいまいだ』という答えが返ってくるかもしれないので」

ここまでは覚えてらっしゃいますね？」

主人公、頷く。

メルヤ、これを確認すると、やや緊張した面持ちで話を続ける。

●正面 30センチ

「つとめて冷静に、穏やかに振り返って行く。

本当は、主人公が気を失ってから今までは、ずっと気が気ではなかった。だが、それを知られると、主人公に心配をかけてしまうので」

幸い、この屋敷まではもう、すぐ傍でしたから。

チハと私（わたくし）で運び、予定通り到着できました。

しかし、倒れてから半日を過ぎても、貴方様は目を覚まされず……。現在に至るという訳ですわ」

〈主人公〉

「それって、つまり……」

●正面 30センチ

「つとめて冷静に。

『主人公を診る、看護師』として告げる。

ここで非常に落ち着いており、また、どう見ても薬の効能で苦しんでいるようには見えない事で、聞き手に『あれ？ おかしいな？』『私達』って言っているのに、メルヤは主人公と違って元気そうだな』と思わせる」

はい。端的に申し上げます。

私（わたくし）達が浴びせられたのは、強い催淫性（さいいんせい）を持つ薬物です。体内に入ると、次第に強い倦怠感に襲われ。

やがて、思うように身体を動かせなくなる作用がある薬です」

〈主人公〉

「……！」

主人公、覚悟はしていたものの、真相を聞いて思わず言葉を失う。  
なるほど。そういう事か。

自分達は、そんな恐ろしいものを振りかけられていたのか。

そう思うと、今朝まで移動できていた事さえ、不思議に思えてくる。

という事は、もしかすると。

わたしが貧弱な身体ながらに騎士として訓練を続けていた事も、多少は役に立っていたのかもしれない……。

主人公、一度そう思い納得しかけるが、すぐに違和感に気づく。

……いや、でもそれは、わたしだけのはずだ。

メルヤさんも同じように、薬を浴びたはず。

なのに、どうしてメルヤさんはこんなに元気そうにしているんだろう……？  
脱出の時、チハちゃんが

『亜人っつーのは、人間より丈夫で、色々耐性あんだ。

だから、見た目小さく見えても、人間の大人並みに体力はある。  
多少の無茶も大丈夫だ』

とは言っていたけれど。

薬物耐性についても、そんなにも差があるものなんだろうか……？

と、目の前の女性が『息災』である事に、途端に疑問を感じてくる。

● 正面 30センチ

「優しく、心からいたわる。

その位この薬は凶悪で、これに耐えた主人公の精神力は目をみはるものだったので」  
今朝まで、歩くのもお辛かった事でしよう。



今も、よく耐えられておられますね」

〈主人公〉

「でも、どうしてそんな薬を……」

だが、謎は他にもある。

そもそも、イザベラはなぜこの薬を選んだのだろう。

主人公達が逃げようとした時、手元にそれしかなかったからこそ、苦し紛れだろうか。

それとも、薬を受けた主人公達がやがて移動もままならなくなつて、そのタイミングを狙つて捕まえるのが目的だったのだろうか。

色々と考えを巡らせるが、答えはメルヤがくれた。

メルヤには、イザベラの思惑について確信があるようだ。

● 正面 30センチ

「【穏やかに優しく。】

主人公がイザベラの思考をまるで読めない事がわかり『やはり主人公のような善人には、イザベラのような悪党の考える事は、見当もつかないのだろう』と思ひ、主人公への愛情が、さらに増したので。

以後、『あの女』とはすべてイザベラの事」

『どうしてそんな薬を』と申されますか。

そうですね。お優しい貴方様でしたら、あの女の下卑（げび）た思惑など、想像もつかぬ事でしょう。

【穏やかに優しく話そうとしつつも、少し声のトーンが下がる。

ここから※マークまで、内心強い怒りを感じながらも、つとめて冷静に話す。  
今は自分の怒りをアピールする時ではないので」

しかし、私（わたくし）には察しがつきます。

この薬はおそらく、イザベラが奴隷を売る際に使っていたもの。

【ここでは『私（わたくし）達』と言う。

『薬を浴びせられた』のは、主人公とメルヤの二人なので」

それを私（わたくし）達に浴びせる事で、身体の内自由と理性を奪い。

【しかしここでは『貴方様』という。

『薬の効能により苦しんでいる』のは、主人公だけなので」

やがて混乱した貴方様が痴態に及ぶように仕向け、貶（おとし）める……。  
おおかた、それが、あの女の目的だったのでしょう」※

〈主人公〉

「……………」

主人公、メルヤの言葉に青ざめる。

しかし、イザベラの目的は判明しても、メルヤが健康な理由はやはりわからない。

今の主人公にとっては、自分の身体よりも、メルヤの身体の方が、よほど気になる事なのだが……。

するとここで、メルヤが少し動く。

SE9   メルヤが身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

声の距離が、少し近づく。

● 正面   15センチ

「【穏やかに冷静に断言する。

そうする事で、主人公を安心させたいので】  
ですが、それは叶いません。」

私（わたくし）が阻止しますから。

ご安心下さいませ。

貴方様の名誉は、私（わたくし）が必ず守ります」

メルヤが主人公を見つめ、きっぱりと言い切る。

距離が少し近づいた事で、主人公はメルヤの頭の角を意識し、それから、彼女の背後にある小さな羽や、何の動物のものともつかない、不思議な形状のしっぽの事を考えた。

主人公は今までメルヤの事を、羊を主体とした、複数の亜人の特徴を持つ『まざりもの』と呼ばれる亜人の女性なのだと認識していた。

だがもしかすると、その前提からして間違っていたのかもしれない。

本当は、メルヤは亜人なのではなく、主人公の知らぬもっと別の種族で。

だから、薬に惑わされる事もなかったのかもしれない。

そんな考えが頭をよぎる。

〈主人公〉

「……あの、もしかして」

そんな主人公が質問しようと口を開くと、最後まで尋ねる前に、メルヤが微笑んだ。

こうなる事を、最初から読んでいた。  
そんな表情だった。

メルヤ、これまでと変わらず、優しく、穏やかに答える。

●正面 15センチ

「『穏やかに冷静に回答する。』

感情を交えず淡々と、落ち着いて事実を告げていく』

はい。ご質問にお答え致します。

私（わたくし）が、貴方様と同じように薬を浴びながら、その影響を受けず。

また、こんなにも効能に詳しいのは。

私（わたくし）が亜人ではなく、淫魔だからです」

〈主人公〉

「！」

●正面 30センチ

「『冷静にしつつも、少し申し訳なさそうに。』

自分なりの事情があったとはいえ、主人公達に隠し事をしてしまったので」  
申し訳ございません。

この地方では極めて少ない種族である事から、これまで素性を伏せておりました。

【冷静にしつつも、真剣に。

自分に危険性はない事、味方である事、最大限の協力の意思を主人公に伝える。

今、主人公に疑われたり、怯えられたりすると、満足な治療ができなくなるので」

しかし此度（こたび）を緊急事態とみなし、チハ達やおじ様、おば様。ガラテア様達にはすでに正体を打ち明けております。

私（わたくし）は皆様の味方でございます。

淫魔の持つ全ての力を使って、皆様のお役に立つと約束致します」

〈主人公〉

「そうだったん、だ……」

『そうだったんだよ』

頭の中に、先ほどのチハの言葉が蘇る。

あの一言には、主人公が気を失っている間に、沢山の出来事があった事が込められてい

た。

チハもまたメルヤの正体を聞いて驚き、受け入れてこの屋敷にいるのだろう。

もちろん、主人公もそうするつもりだ。

だから、メルヤが淫魔である事自体は、特に問題ではない。

『メルヤさんの言う通り、この地方ではめったに見ない存在だから、亜人さんなどと勘違いしていたよ』で済む問題だ。

問題があるとすれば……『今』正体を明かした理由が、何であるかだ。

## ● 正面 15センチ

「『少しいたわしそうに、心配そうに。』

メルヤの告白を受けて、主人公が何かを話そうとしているので。

だが、そつとそれを止め、引き続き話す。

また、今は自分の正体に関する主人公のコメントを、あまり聞きたくないので。

もし『不気味だ』『恐ろしい』と言われたら、とても傷つくので。

優しい主人公であればまずそんな事は言わないとわかっていても、不安そうにされるだけでも悲しいので」

ああ……良（よ）いのです。無理にお話にならなくて。

「これまで『非常に珍しい亜人である』と誤認されていた事について述べていく。

仮にメルヤが亜人だとしたら、人間以外にも、三種類以上の動物の要素が混じっている事になるの〜」

貴方様も、本当は『何かがおかしい。こんな亜人は見た事がない』とお思いになつていたでしょう？

仮に私（わたくし）が亜人なら、混じっている種族の数が多すぎますもの。

「穏やかでありつつも、声のトーンが、より一段階真面目になる。」

「そうする事で頼れる存在だと認識してもらい、主人公を安心させたいので」  
ですからこれからは淫魔の力をもって、貴方様を苦しめる症状を緩和するお手伝いを致します。

そしてガラテア様達が解毒剤をお持ちになられる時まで、一緒に待ちましょう」

SE10 主人公が身体を動かす音

「【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「で、でも。それって……っ！

だめ。だめだよ。

メルヤさんだって嫌でしょう？



いくらわたしを助けてくれるためだからって、そんなのっ……!!」

主人公、思わず起き上がり、メルヤからの提案を断ろうとする。

さすがの主人公でも、メルヤがこれから何をしようとしているのか、はつきりとよくわかったからだ。

だが、メルヤは小さく首を振り、優しく微笑みかける。

それから、主人公をまっすぐ見つめてこう言った。

### ● 正面 15センチ

「【穏やかに優しく微笑む。】

ふふ。みなまで言わせないで下さい。

【※マークまで、少し強調気味に言う】  
嫌なはずがありません。

私（わたくし）がそうしたいのです。 ※

【穏やかだが、はつきりと自分の意思を伝える。】

こんな時まで、自分自身の事よりも、メルヤの事を気にしている主人公がいておいしいので。

また、これによつてますます『主人公を絶対に助けなくては』という気持ちが強まった

ので。

そのためにもまずはこれまでの出来事を振り返り、主人公への想いを今一度伝える。  
メルヤは三日前、主人公に救い出されるまで、主人公にはもう二度と会えないと思っていた。

奴隷として売られ、初めての恋は、屈辱に押し流されて消えていくのだろうと思っていた。

だが、そうではなかった。

主人公は任務を放棄し、騎士である事を捨ててまで自分を助け、今は自分を助けたせいで苦しみ続けている。

だから、自分はそんな主人公を絶対に守りたい、助けたいと思っている」

貴方様は、私（わたくし）の身体だけでなく、心までお救い下さった。

絶望しかけていた私（わたくし）達に、ずっと優しい言葉をかけ、ここまで連れてきて下さった。

屋敷にいた頃からずっと、私（わたくし）の心は貴方様のものです。

【優しくそつと。

前日譚02での出来事を振り返って言う】

『お慕い申し上げます』と、言っただけでしょう？

これより生涯、貴方様に私（わたくし）の全てを捧げましょう」

〈主人公〉

「……………」

主人公、メルヤの告白に強く胸を打たれながらも言葉が出ず、ただメルヤを見上げる。

メルヤが自分に親しみを感じてくれている事はわかっていた。

でもそれは『潜入調査にやってきた騎士とおぼしき女性が、こっそり現れては亜人の少女達をサポートしているから』だと思っていた。

『人間として、それなりに好ましい』『今は主人公に頼らざるを得ない』『ゆえに従うのは、やぶさかではない』という感情は抱かれても。

それ以上に想ってもらう事など、考えても見なかったのだ。

だが、主人公は、こうも思う。

……いや、違う。

想ってもらえるなんて思っていなかったけど、期待はしていた。

もしわたしが、ちゃんと全員を救出できて、皆に平穏な暮らしを約束出来たら。

メルヤさんが、少しはわたしの事を『いい』って思ってくれるかもしれないって、思った。

だけど、わたしはそれに失敗した。

それに、たとえこれからわたし達の街へ行けた所で、わたしがみんなのすべてを保障してあげられるわけでもない。

それにそれに、お姉さま達に会ったら、メルヤさんだって『お姉さまの方が素敵だ』って思うんじゃないかって、思ってた。

なのに、メルヤさんは、どうして——……。

と。

そんな中、メルヤが近づく。

主人公がまだ何も言わぬままにいるのに、もう、すぐそばまでやってくる。

メルヤ、声の距離が近くなる。

## ● 正面 0センチ

「【穏やかにそつと。

母親のように優しく】

※特に聞き手をドキッとさせるイメージでお願いします

だから……もう、我慢なさらなくて良いのです」

メルヤ、主人公の右耳にささやく。

これによって声の方向が『正面』から『右』になる。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと優しく。」

甘く誘うように。

性衝動に苦しめられる主人公の理性を崩すために、ダメ押しをする」  
さあ……この手を握って。

今から沢山……気持ちいい事を致しましょう？」※

ここでフェードアウトして終了。